

たぬきのまちづくり

民話『阿波の狸合戦』の舞台となった小松島市では、金長狸は商売繁盛の神様として人々に親しまれ、狸をテーマにしたユニークなまちづくりが行われている。

日本全国に狸が登場する民話は数多くありますが、その中でも特に有名なのが『阿波の狸合戦』です。この話は藩政時代の小松島を舞台にした民話で、話の真偽はともかく、この中に登場する染物屋の主人・茂右衛門は実在の人物。明治末期に大坂の講談師が演題に取り入れて一世を風靡したことから、講談本と茂右衛門の直系の子孫・梅山家に残る言い伝えをもとに、昭和十三年「天下分け目の阿波たぬき合戦」（新興キネマ・後の大映）が映画化され、空前の大ヒットとなりました。

そのお礼にと、当時の映画関係者らが日峰山麓に金長大明神という小さな社を建てたのが、金長神社の始まりです。戦後、再び映画化されて大ヒットし、大映の永田雅一社長らの寄付によって昭和三十三年（一九五七）現在の場所に金長神社が建てられました。以来、商売繁盛の守り神として多くの人々が訪れています。

この他にも、金長の名の付くものは市内の至る所にあり、遊歩道の壁面やバスをはじめ、紙芝居や芸能、食堂やお菓子と大活躍しています。平成元年には、市内の新港郵便局が改名して「金長たぬき郵便局」が誕生しました。動物の名前についた郵便局は全国で初め

A famous folk tale in Komatsushima "Awa no tanuki gassen" was made into a movie and became popular. The heroic character, a racoon dog named "Kincho Danuki", is loved by people as a God for flourishing business. We are working on using the racoon dog in our community as a symbol of our city.

てで、オリジナルのためき形の風景印や狸の絵はがき、ふみカードが人気を呼んでいます。

また、平成三年には、市内の若者達によって金長狸をイメージした「金長太鼓」が結成され、これまでの和太鼓のイメージを打ち破る、陽気で明るく愉快な演奏を披露しています。平成十年（一九九七）には、金長民話を語り継ぐ市民講談師を育てようと「阿波狸合戦講談語り部養成塾」を開講するなど、市をあげて狸のまちのイメージづくりに取り組んでいます。



小松島市創作太鼓振興会は、「ふるさと創生一億円事業」の小松島の地域づくり団体として、小松島市が市制を施行して四十周年を迎えるという節目の年に産声をあげました。

源平合戦、屋島の戦いに向かう源義経軍が小松島に上陸した所縁から行軍をイメージした勇壮な和太鼓曲「義経太鼓」と、「阿波狸合戦」における主役格で小松島では有名なたぬきの「金長」をモチーフに、陽気な阿波の国の「阿波踊り」に象徴される浮かれた様子を表現した「金長太鼓」。故三木稔先生に作曲を頂いた、二つの創作太鼓を演奏しています。

和太鼓は、神事や祭事など、昔から地域に密着した催しを通して親しまれ、また、伝統芸能として継承されてきましたが、近年は、郷土を代表する伝統芸能として、また「日本の心」を伝えるものとして見直されています。

和太鼓の魅力として、「気軽に始められる」点が挙げられますが、チームワーク、息を合わせるなどがとても大切で、「叩く」というシンプルな動作により生まれる響き、ダイナミックな動きが、集団として協調する様は本当に魅力的だと思っています。

創設から三十年まだまだ未熟な演奏・演出ではありますが、和太鼓の伝統を継承し、地域の活力となる新たな魅力を普及させていきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

小松島市創作太鼓振興協会 会長
立川 晶規 さん